Chapter 38 : **償いのカニとベリーの絆**

ある穏やかな午後、イワパレスは非番だった。トロール活動もクールダウン中。

シャワーズの家の前を通りかかり、ただ静かな散歩を楽しもうとしていただけだった。おやつの匂いでも探せたらラッキー、くらいの気分で。

すると——  
ギィ……と、扉が軋みながら開いた。

中に立っていたのは、イーブイズ一同。

ブラッキーは腕を組み、  
エーフィはお茶を静かに啜り、  
リーフィアとグレイシアは庭のスタンドの両脇に立ち、  
ニンフィアはクリップボードを持って、  
ブースターはカーテンの陰からのぞき込み、  
サンダースはいつものように疑いの目を光らせていた。

そして中央にはシャワーズ。穏やかだが揺るがぬ視線で、イワパレスを見つめていた。

イワパレスは凍りついた。  
目は大きく見開き、汗が滴る。  
甲羅は反射的に引っ込んだ。

「やば……また波乗りされるかも……」と呟いた。

だが、シャワーズは攻撃しなかった。  
代わりに一歩前に出て、ツヤツヤに実ったオボンの実を差し出した。

「あたしの庭で育てたの。」

イワパレスは驚きのあまり、甲羅の隙間から顔を出した。

「……俺に？」

戸惑いながらも、爪でそっと実を受け取った。  
そしてゴソゴソとポーチを探り、くしゃくしゃになった封筒を差し出した。  
謝罪金。特別なものではないが、せめてもの罪滅ぼしの気持ちだった。

「……す、すまん。あの浜辺のこと……あと色々……」

シャワーズは穏やかに微笑んだ。

「あたしの彼氏を毎週溺れさせようとするの、やめてくれればそれでいいわ。」

他の家族も黙って頷いた。全員が納得したわけではなさそうだが。

イワパレスは照れくさそうに親指を立てると、急いで「からをやぶる」でその場を去った。  
砂煙と、気まずい沈黙だけが残った。

「今の……謝ったのか？」とサンダース。

「カレンダーに記録しておくわ。成長フラグ達成ね。」とニンフィアがメモを取る。

「同じカニだよね？俺のこと70回くらい海に放り込んだやつ……」とブースターがチップスを食べながら呟く。

シャワーズはくすっと笑った。

「学習は遅いけど……全くの手遅れでもないかも。」

イワパレスが「からをやぶる」ダッシュで遠ざかっていく中、グレイシアは腕を組み、唇をきゅっと引き結んでいた。

「あいつ、もしまた冷蔵庫の近くに岩を落とそうとしたら……甲羅を氷の彫刻にしてやる。」

その隣で、まだ手に土がついたままのリーフィアは穏やかな表情でため息をついた。

「でも、ちょっとは反省してたように見えたよ。実と小銭……少しはやりすぎたって自覚したのかも。」

「あたしの娘が彼氏を海から釣り上げる羽目になった過去十回……あたしが抱えてなかったこと、感謝するべきね。」とグレイシアが鼻を鳴らす。

リーフィアはくすっと笑った。

「カントーまでイワパレスに乗ってサーフィンできるくらい、強く育ったよ。大丈夫さ。」

シャワーズは、両親の会話を黙って聞いた後、扉のところから静かに振り返った。

その手には、まだあの実が乗っていた。なぜか重く感じられた。

「トロールなのは間違いないけど……今日のあいつは、怯えた、謝りたそうな顔してた。」

ゆっくりと中へ戻り、その実を家族の食卓に置かれたボウルにそっと入れた。

ひれを軽く揺らしながら、淡く微笑む。

「記念にとっとこ。」

グレイシアはちらっとリーフィアに目を向けた。

「……成長したわね。」

リーフィアも頷いた。

「母さんそっくりさ。怒りっぽいとこを除けば。」

グレイシアはにやりと笑った。

「許す心はあんた似ね。」

そのとき、シャワーズが戻ってきた。エプロンを締め、タオルを片手に。

「はいはい、ちょっとごめんね。ブースターがまた炊飯器爆発させたみたい。」

彼女が去るのを、二匹は誇らしげに見送った。

優しくて、強くて、バカを見抜く目を持った娘。  
ちゃんと育ってる。

グレイシアはもう一度腕を組み、去っていくシャワーズの背を見つめながらぼそっと呟いた。

「妊娠ってほんと博打よね……素晴らしい娘が生まれることもあれば……」

そして、ちらりとベリーの入ったボウルを睨んだ。

「……あんなのをひり出すこともある。」

リーフィアは瞬きをし、頷くべきか咳払うべきか迷った。